

認め愛, 助け愛, 期待をかけ愛, 高め愛!

＜「評価」を通して見えるもの①＞

「エビデンス」。

コロナ禍の世の中になってから、とかく頻繁に耳にすることになった言葉です。簡単に言うと「根拠」「証拠」といった意味で使われる言葉ですが、医療業界で、「症例に対して効果があることを示す根拠・証拠」という形で使われていたものが、コロナの影響であつという間に市民権をもつようになりました。

私たち教職員は、1月9日に学校評価会議を実施しました。その参考指標の一つとしたエビデンスは、12月末に実施した後期学校評価です。当校の学校評価等のアンケートは、いわゆる4件法という手法、つまり肯定的評価が2段階、否定的評価が2段階設定の中から回答を選択する形をとっています。

生徒、保護者、教職員のアンケート項目は何項目にもわたりますが、私が最も重視するのは、「子どもたちは学校が楽しいかどうか」という項目内容です。この項目における今回の後期学校評価結果での肯定的割合は、生徒、保護者ともに90%を超えました。前期から比べると、どの学年でも4ポイント前後高くなりました。後期は、新風祭や合唱祭など大きな学校行事があるなど、子どもたちの活躍の場・成長の機会が多かったことがその要因の一つだと考えられます。一般的には、90%超の肯定的な評価ならば及第点というところでしょうが、まだまだ手放しで喜べるものではありません。

究極の目標は、この値を100%にすることです。つまり「学校が楽しくない」という生徒がだれもいない学校にすることです。今後もこの目標に向けて学校経営に邁進したいと考えています。

さて、生徒が「学校が楽しい」と感じるのは、「学校で嫌なことがない」、ということです。子どもたちにとって「嫌なこと」の対象となるのは、大きく分けて2つあるととらえています。「勉強」と「人間関係」です。

「勉強がわからない」「授業がつまらない」では、到底学校が楽しい場にはなりません。だからこそ、我々教職員は、日々指導力の向上を努力義務として授業改善に取り組まなければなりません。

もう一つの間人関係。友だちに嫌なことを言われたりされたりからかわれたり、仲がよくない子がいたりうまくやっいていけない友だちがいたとすれば、これも学校が楽しい場にはなりません。だからこそ、いじめのない学校づくりや問題行動の予防・事後対応に全力を傾けるわけです。

しかし、この2点については、我々教職員のみならず、子どもたち自身にも保護者にもそれ相応の努力をしてもらわなければならないのは言うまでもありません。

学校評価に話を戻します。

生徒・保護者・教職員アンケートが集計されて数値化されるわけですから、その段階ではいわゆる定量的評価ではあるとは言えますが、その元になる個々の評価は、根拠となる判断材料が明確にある場合は別として、往々にして感覚的な判断をする場合も多いのではないのでしょうか。しかし、こういった感覚的な評価がいい加減かと言えば、決してそうではなく、学校現場で大事にしたいのも、まさにこういった肌感覚なのです。

例えば、朝や帰りの会や授業の開始時に、教室に足を踏み入れた瞬間、「あれ、やたら教室の空気が重いなあ」「何かクラスでトラブルがあったのかなあ」などと感じるがよくあります。そういった空気、つまり『雰囲気』は敏感にわかるのもので、その予感的中していることがほとんどです。

このような、ムードとか雰囲気とか場の空気といった類のものを、AIや親和型ロボットが測定・評価する研究開発も進められているらしいですが、一般的には数値での計測は難しいものです。しかし、この『雰囲気』を積極的に感じ取ろうとする意識や敏感に感じられる嗅覚こそが、教師に必要な資質・能力の一つと言っても過言ではないと考えます。

「学校が楽しい」と思うのは、『雰囲気』がいいと感じるからです。では、一口に『雰囲気』といっても具体的に何を指すのでしょうか。

新潟市では、目指す学校教育の重点目標達成の基盤として、「支持的風土」の醸成を掲げています。まさしく、学級・学年・学校等での集団としての「支持的風土」こそ、『雰囲気』そのものの正体かも

しません。そして、「支持的風土」づくりに向かうための筋道として、『傾聴・受容』『支援』『自律』の重要性を挙げています。つまり、「支持的風土」の土台となるのが、一人一人の生徒とのコミュニケーションだということです。

先生方には、教育相談等設定されている機会以外にも、日常の会話や生活ノートを通じて、生徒とのコミュニケーションを大切にいただいていることを、たいへんありがたく感じていますが、先日、ある広報誌で、新潟県スクールカウンセラー、新潟教育研究所の教育相談専門の木澤弘先生が、次のような内容を記しています。参考のために。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

子どもとの相談に応じるときの大前提として、子どもたちの心は、相談する時点で既に傷ついているということです。ですから、心の傷はうずいていて、癒しを必要としています。この想像力こそが大切です。

では、癒しはどのようにして起こるのでしょうか。それは、「退行」で起こります。具体的にどのような場面で「退行」が起こり得るかという、一般社会で例を挙げれば、お祭り、花火、懐メロ、居酒屋など、つまり、その人にとって心がほっとする場面です。人は特に童心に帰って心を癒すのです。子どもなら、いわゆる赤ちゃん返りです。「退行」は、すべての人に備わっている自然治癒力を活性化します。「退行」が認められ受け入れられて、人は安心感の中で自分自身を癒す体験をするわけです。子どもとの相談の場面では、「退行」を保証し、温かく包み込んであげることが心がけてほしいものです。

女子レスリングの吉田沙保里さんがオリンピックで敗れたとき、「お父さんに怒られる」と言って幼児のように泣きじゃくりました。これが「退行」です。「大丈夫。よくがんばったよ」とお母さんは愛娘の「退行」をありのまま抱えました。その後の吉田さんは見事に立ち直りました。霊長類最強と呼ばれ、国民栄誉賞に輝いた人間でさえ人の子だったわけで、子どもを温かくも厳しく叱咤激励する父親と、うまくいかなかった時にやさしく抱え込んでくれる母親あつての彼女の存在だったと考えます。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

まさに、この内容は、先に述べた『傾聴・受容』『支援』『自律』に連なります。そして、繰り返しますが「支持的風土」とは「互いに認め合い、助け合い、期待をかけ合い、高め合う、温かい学級の風土」ということです。とにもかくにも、雰囲気の良い学級、雰囲気の良い学年、雰囲気の良い学校、雰囲気の良い家庭、雰囲気の良い地域、雰囲気の良い世の中、そして、雰囲気の良い教務室をめざしましょう。そして、

これからの社会は、様々なことがA Iにとって替わられると言われていますが、機械よりも我々人間が勝れるものがあるとしたら、それは『愛』の存在です。

A Iも『あい』には違いないのですが、私たちのめざす『あい』は『愛』。つまり、「互いに認め愛、助け愛、期待をかけ愛、高め愛」のある学校づくり、学級経営でありたいものです。